
アキとウチと素直になれない心

暁 巧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アキとウチと素直になれない心

【Nコード】

N9002N

【作者名】

暁 巧

【あらすじ】

島田美波のちよっぴり切ない、最後にほっこりするお話。
暴力無く、美波と明久が少し歩みよります。
よかったら、どうぞ。

あー、もう！ 最悪よ！ ……はぁ…

「ウチって何で、こう——素直じゃないんだろ…」

自分のことに何度嫌気が差したか…

些細なことでケンカして、既に放課後まで喋らなかった。

ケンカというよりは、ウチが一方的に怒った気がする。ううん…
きつと、そうなんだと思う。それでも、納得いかなかった…ただの嫉妬？… かも知れない。何で木下にはあれだけ優しいのかとか…
こういう時だけ木下を男だと見て、暴言を吐いた。アイツは、初めから男だと言っていた。それにも関わらず…

「男のクセに気持ち悪いのよ！ アキに近よらないで！！——」

これ以上は、思い出すだけでも自分に吐き気がする。…ウチって最低だ。アキじゃなくても怒るだろうけど、アキは、友達をととても大切にする。その“友達”を傷つけた“友達”をどう思うのか…
考えるだけで不安になる。

あ。

「アキ」

何でこんな時に限って、一番逢いたくない人と逢ってしまうんだろ？…

「美波…」

「っ！…」

聴いたことの無いほど冷たいアキの声に、ウチは身を固めた。

「美波。あのさ」

ダメ！ これ以上喋ったら。嫌な予感がある。

「黙って！！」

「！」

違う、ウチが言いたいのは！…

「あ、あの、アキ」

「いつもそうだよね？… 僕の話の聞かずに一方的に…

僕が傷つかないでも思ってるの？」

「ううん！ そんなこと！」

「そんなことないって言わないよね？ だったら、そんなことできないはずだよ」

「だって」

「だって、…何？」

「ア、アキが…」

「僕“が”？ ああ、僕なら弱いし殴りやすいってこと」

「ち、違うの！」

ダメ！ やだ、どうしょ。アキがスゴい怒ってる。このままじゃ、ウチ、アキに……

「僕さ、殴られる為に友達になったわけじゃないんだよ？」！ ア

キ、あの「はあ」。まだ一方的に話をするつもり？ 美波は

「お願い聞いて！」

「“お願い聞いて”って、僕も何度も言ったことあるよ？」

「お願い…」

ヤバイ。今泣いて何も言わなかったら、……ううん。理由を話せば、アキならきつと…

それできちんと、ウチの想いを――

「ウチ、ウチね、アキのこと…」

「美波」

「待つて、アキ！ 最後まで、せめて、」

「僕は、美波のことが嫌い。これで全て解決」

「へ？ あ、はは…ア、アキったら、冗談キツいよ」

「美波つてさ、殴られるの好き？」

「好きなわけではないじゃない！」

「僕もそうなんだ」

「あ… えつと…」

「友達でいるから、絡まれるんだよね？ じゃあ――」

待つて待つて待つて待つて待つて待つて待つて待つて待つて待つて！
ウチとアキの関係が壊れる！！ アキ、お願い…

「待つ」

「友達じゃなくなればいいんだよ。ね？」

「！ イヤ…」

それは、ダメよ！ ウチ、何でもする。だから、

「友達は今解消ってことで、もう僕には構わないでね？」

「そん——」「島田さん」!？」

声が出ない。泣いてるかも…

早く、何か言わないと、一生取り返しのつかないことに…

ウチは、ただアキのことが…アキ、アキ!…

「アキっ! あのね」

「違うよ? 島田さん」

「っ… な、にが?…」

“島田さん”と呼ばれる度に、胸が締め付けられる。何だか、上手く呼吸できない。

「僕は、“吉井”。だよ? もう友達じゃないんだから、名前で呼ぶのは、どうかと思うよ?」

「ああ…」

もうダメ…。ウチは、立っていられなくて、崩れ落ちた。

アキは、手を差し伸ばしてくれない。

「さようなら」

アキは、ただ一言。そう言って、一度も振り返らずに去っていった。

「アキ! 嘘だと言って! 帰って来て!?! もう怒らない、二度と叩かない、暴力なんか奮わないって約束する! 誓う!! だから、アキ! アキ!! また名前で呼ばせて! ウチのこと名前で呼んでっ!!! アキィィっ!!!」

ああ、壊れた。もう戻らない、戻れない。もう、もう……
ううっ……アキ……アキ……アキっ……

「アキイ……つく、うううっ！ 夢っな、ら醒、めて……Oh G
ott…（神様…） ich B i t t e ! R e t t u n g（私を
救ってください）」

バツ！ と布団を捲って起き上がる。
涙がウチの頬を流れた。

「はあ、はあ……」

夢を見た。アキに嫌われる夢を。
夢を見た。後悔して泣き叫ぶ夢を。

ホントに夢でよかったって思った。
安心したら、また涙が出てきた。
今でも、胸が締め付けられる。ウチは変わる！ 約束した、誓っ
た。もしかしたら、神様がくれたチャンスかも知れない。あれだけ
はつきり覚えている。あの怖さと絶望感…。

だから、今日は、もっともっと、素直になろう。ウチの全
部を見てもらおう。それでも、まだダメだったら、好きになっても
らえるように、もっともっと努力しよう。もうあんな想いは、こり
こりだ。

「おはよー。ア、アキ」

「美波、なんか元気ない？」

「なっ！？ バカっ！ そんなわけ、ない…じゃない…」

ウチは、アキを見て泣きそうになってた。優しいアキだって、まだちゃんと友達だって思ったら、涙が止まらなくなった。

「美波！？ どうしたの！？ 何があつたの！？ 誰かに傷つけられた！？ よし、そいつぶっ飛ばしてくる……！」

「落ち着きなさいよ」

「だって、美波が！」

「ウチは、大丈夫」

「本当に？」

「ただ…」

アキに言おうか迷ったけれども、ウチが迷ったのも一瞬だった。

「えっと…アキ、笑わない…？」

「え？ うん、笑わない」

「その…怖い夢を見ただけ。だから」

「じゃあ、何で、僕を見て泣いたの？」

こういう時ばかり鋭いんだから。

いざアキが目の前にいるって思ったら、話すのが…怖くなった。

「美波？ 嫌だったら、話さなくてもいいんだ。でも、僕でよかつたら聞くから。話すだけでスッキリするかも知れないし。ね？」

こくり 頷いて返した。やっぱり、アキは優しい。

「アキに…、き、嫌いだって、友達じゃなくな、ったから、名前で呼…ぶなって、う、ウチ、のこと…島、田さんって…」

上手く言えなかった。アキに話しているうちに、その時のことを思い出して、泣いてしまった。

それでも、アキには伝わったのか、アキがちょっと怒ってる。夢のことでも、自分のしたことが許せないのだろう。アキは優しいから。

「なん…何だよそれ！ 夢の中の僕、最低じゃないか…！」

「大丈夫。もう大丈夫だから」

「大丈夫じゃない！ 美波、泣いてるじゃないか！」

「ウチ、アキの優しさに甘えてたんだなって…ていうか、付け込んでるって思った」

「全然平気だよ！ 美波が気にすること……」

「うん、でも…」

このままだと、またアキの優しさに付け込んでしまう。そんなことは、もうこれっきりにする。アキに好きになってほしいから…！

「アキ、ウチね…」

「ごめん！ 本当にごめん…！ 夢のことは、嘘だから！ だから、仲直りしよう…！」

「え？」

いきなりすることに驚いた。全くもって、アキは予想がつかない。言っていることは的外れで、けど、的を射ていることを言っている。でも……

そう。夢の中のこととはいえ、ちゃんと帰って来てほしかったのかも…ウチのところに。

ワガママだなあー、ウチって。

でも、スゴいな、アキは。いつだってウチを救ってくれるんだもん。

ウチだけのヒーロー。ウチだけの――

「ich Form Messias――（私の救世主様）」

「へ？ 何？ 美波」

「ふふっ ♪ なーいしょ ♪」

「？」

ウチは、疑問顔のアキにイタズラしたくなった。

ちゅっ と唇と唇が、軽く触れるだけのkiss。ウチのホントの気持ち。神様になんて頼まない。どうだ。アキ。

「バーカ」

大好きなんだから

「っ！」

――明久side――

そう言って僕を振り返った美波の笑顔は、スゴく眩しくって、今のkiss以上に僕は照れてしまった。

こんな綺麗な女の子にkissされたんだって…

美波が素直になれないなら、協力してあげよう！ そうすれば、美波は誰かとズキッ？ あれ？ 何かちょっと嫌かも知れない……僕、…とか…。美波に嫌われて……。いや、うん。話をきちん

と聞こう。もつと、仲良くなれるかも……って、僕には姫路さんが……それも、考えよう。姫路さんより、美波を好きになるかも知れないし……

そう考えていたら、自然と手を出していた。

「え！？ ……アキ？」

自分でも驚きだ。

「いや、その……なんて言うか……」

「何よ？」

何だか嬉しそうに微笑む美波に、後押しされた。

「手、出して」

「う、うん……」

美波の手をしっかりと握って、僕らは歩き出した。

「行く」

「うん」

美波のお陰で、今、少し変わった。みんなを驚かせてやろう。ゲームだけじゃない、勉強も頑張るんだって。

ゆっくりとでもいい。頑張ろう。恋も勉強も。

…祝日だっというのを僕も美波も忘れてたようだ。

「あー、はは。こんなこともあるよね」

「そ、そうね…」

「？ どうしたの、美波」

「よっ、よかったら、お昼多く持ってきたし、一緒に食べない？」

「うん、わかった。でも、お昼までは——」

「のんびり」「一緒に」

「「え？」」

「「あはは」」

「じゃあ、のんびりしようか美波」

「うん、一緒に。ね」

「「こんな一日も、悪くないかな」」。

（後書き）

どうでしたでしょうか。少しでもいいな。と思っていたただけかもしれません、幸いです♪

感想等もお待ちしています。

書きたい2次が多くて、妄想しまくります。妄想して笑うな、オレ（苦笑）

それではまた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9002n/>

アキとウチと素直になれない心

2010年10月24日00時35分発行